

さてかうして此の書の現存が明らかになつて見れば、是非とも之を寫し取らねば、今後この方面の研究は進められなくなる。ところで總體の枚數はほど二百五十枚、閉館中を特に余の爲に許してくれた閲覽時間は十一時から三時までそうして自分の當地出發はあと七日——然も日曜の休みを中に挟んだ——を餘す九月九日、それを延ばすと郵便車以外東行列車は全く無くなると謂はれて居る事情である。毎日四時間に四十枚あまり宛を寫さねば、抄寫の目的を達し得ない譯だが、それは到底出来ることではない。思案にあぐんでまた石田君に相談した結果、丁度當時この地に居られた東京の今井（政吉）君と滿鐵から留學中であつた宮崎君との助力を仰ぐこととなり兩君は多忙の中を繰合せて筆寫の援助を快諾してくれられた。全く天來の福音である。ところで翌日三人精力をつくして寫し得たのが合して三十枚に過ぎず、この調子では期日の終になほ數十枚が残ることになる。何とか更に方法を講じなければと焦慮した結果、某氏の入智慧で、どうせ館では復古同様に扱つて居る書物の事だから、番人に謝禮をやれば内密で貸してくれるかも知れない。もし持出す事が出来れば二三日で寫してしまへるではないかといふので、明日早速この妙案を試みる事にした。

ところで翌日館に行つて見ると驚いたことには入口が閉ざされて居る。またかと落膽したが、譯を話して別の通門から入ることが出来た。聞けば門衛等が急に召集されてしまつたので、門を開けて置くことが出来ないとの話、尤も至極な次第だ。さて機會をねらつて、昨夕來大に練つた妙案を、大事を取り乍ら實行に移して見た。ところが妙案はこちらだけの妙案で、貸附兼監視の背蟲の先生、館規を説き聞かすばかりで頑として應じて呉れない。規則を心得ないのでといふやうな言ひわけをして、宜しく引き下らざるを得なかつた。併し乍ら自分の焦慮には大